

## 外交を読む―ガイドライン・日中関係（99・7・16）

中 江 要 介（昭17・9・文丙）

### はじめに

中江です。村尾君の紹介はいろんなところに話が及んでいますが、そのへんのところを面白く書いた「らしくない大使のお話」という本は大変な評判でよく売れて、もう売切れなのです。増刷すればいいと思っていますのに、けちな出版社は絶版にしたのです。何処がけちな出版社かというと村尾君のいた読売新聞社で、甚だ残念なことあります。私の話はいつも独断と偏見に基づいているので、皆さんはなれておられると思いますが、思いのたけを言うとか何日かかってでも尽きないくらい沢山あります。我々の歳になると、方々でする話は大体愚痴になるか説教になるかどっちかです。若い者の前では説教になると、同年輩になると愚痴になる、私の話も愚痴っぽいところが多いと思うので、それはご理解頂いて。早速

## ガイドライン

表題に書いてあります「ガイドライン」は米国の覇権主義だし、「日中関係」——歴史認識の裏には悪魔がいる。これで私の話は終わったようなものです。「ガイドライン」が何故そうなのかということは、そもそも我々日本人は日本を守る気持があるのかどうかというところからこれは出発していると思うのです。冷戦時代であつたらアメリカに守ってもらつて、ソ連圏、共産圏と対抗するというのも一応理窟が通つて、納得できていたように思うのです。けれども冷戦が終つたばかりでなく、ソ連邦は崩壊したのです。ソ連邦という国はないのです。国連憲章を読みますと、五つの常任理事国のなにもう無くなっている国が二つあるのです。「ソビエト社会主義連邦共和国」これは無くなった。「中華民国」これも無くなった。ですから、五つの常任理事国のうち二つは崩壊するか無くなっているのに、その後出てきたエリツインとか中華人民共和国とかが、あたかも自分達は昔からの常任理事国であつたような顔をしてやっている。これを誰も不思議に思っていない、これも不思議な話です。要するに世の中はいい加減だ、相手がいい加減ならこっちもいい加減にみてやればいいじゃないかということです。そうみますと、冷戦が無くなった後、日本は一体何を何に對して守るのかということが全然分らなくなっているはずですが、そ

ういうことをあんまり言わない。兎に角、アングロサクソンと一緒にいればいいのだと大きな声で言う人がいて、皆もその気になっているというのが今の習性のように思うのです。マスメディアにも責任があると思いますが、それこそ自主性が無いというか、甚だ情けない国民になっているという気もするのです。何れにしろ、冷戦が終っても引続き日米安保で行くのだと積極的に言わないまでも、もう冷戦が終ったのだから、日本は自前の軍備を持つのだと言う人はあんまりいません。それでは日米安保を見直そうと言う人もあんまりいないし、日米安保をそのまま継続することに反対だという声もあんまりなくて、結果的には日米安保体制を続けることが黙認、ではなくて黙過、見過されていくままという気がします。もしそれが前提で、日本を守る手だては日米安保体制だというのが暗黙の方針だとすると、それなら効率よく十分に守ってもらわなければならない、中途半端では困ります。ガイドラインは中途半端で、本当に守ってもらわないのなら後方支援のみならず、もっともつと前方まで出て行ってもいいではないか、とそれくらいの意見があってもいいのに、その意見ありません。何とまあいい加減なまままで来ているガイドラインですが、政府は昔からそうなのです。何かやると必ず反対が出てくるのですが、最近はどこから反対が出てくるかよく分りません。自自公などと言いつつと野党が何処にあるか分りません。それにしても新聞などが、憲法との関係はどうだとか、いろいろやかましくいろいろ言うものだけ

ら、それに対して説明するのに一番困ったのはアメリカだろうと思うのです。アメリカの本音は、自衛隊がフルにサポートしてくれて、米軍が十分に活動できるようにしたいというところのように思われるのですが、私の見るところ、アメリカの本音は実はそんなところではなくて、米軍基地を日本に置いておきたい、それだけだという感じがするのです。米軍基地はフィリピンにも無くなったし、シンガポールにも無くなったし、ベトナムのカムラン湾も無くなったし、あと韓国も大して頼りにならない。要するに、沖縄を始めとして日本にある米軍基地が無くなると、アメリカがグローバルに、アジアだけではなく戦略的に、十分覇権主義を唱えることができなくなる。難しくなる。つまり、唯一の超大国として世界中に威張り散らすためには、ヨーロッパにはNATOという支持者がいますが、アジアには今や在日米軍基地というのが非常に貴重な存在になっています。これを守っていくために何が必要かというと、日米安保条約が守られることです。日本が日米安保を止めようなどと言ったら一番困る。だから日本に日米安保が必要だということを説得するのに、アメリカのグローバルな戦略的目的に資するために、お前の防衛体制が必要なんだと言ったら、日本人はなにもアメリカのために俺達はやることはない、と言って怒るだろう。だから、本当はそうなのだけれども、そういう議論にはもっていけない。それなら何を持つていくかというと、日本、お前は怖いぞ、お前の周りにはまだまだ脅威があるぞ、冷戦が

終ったからといって油断はならんぞ、極東とくに朝鮮半島とか台湾海峡をしろ、こういうものがあるのだから日米安保は大事なのだ、日米安保に基づく米軍の抑止戦闘力、これは日本を守る重要な要素だと言うのです。こういうことを言わないと日本人は日米安保を支持してくれないだろう。こう思つて北朝鮮が脅威だとか、台湾海峡が不安定だとか、そういうことを言うのです。そういうのにまんまと引っかかった人が、北朝鮮はこわい、台湾は危ない、そういうことを言うのです。

何でそんなに怖いのか、先ず北朝鮮が脅威かどうかという問題です。仮に脅威だとすると、北朝鮮が何故日本を攻撃しなければならんのだろうかを考えてみます。これはよくよく考えると北朝鮮の当面の敵は当然南朝鮮、韓国です。韓国と争うというのは、韓国の半島が二分されて以来の課題なのです。韓国と戦うために必要なことというのは、韓国の後ろにいるアメリカを何とか引離さなければならぬ、アメリカがついてくる限り手強い、アメリカを何とか北朝鮮に敵対する国でなくするためにどうしようかというのが北朝鮮の外交の全てだといつてもいいと私は思うのです。北朝鮮の目標はアメリカなのです。日本なんて関係ないのです。日本は何処にいるかという、アメリカの後ろに座っているだけなのです。そんなものを攻撃しても仕様がないうのです。だのに、なぜ日本の人は北朝鮮は怖い、怖いと言うのか、このことを考えてみると、日本人のなかに何か北朝鮮に悪いこと

をしたと思つてゐる人がゐるのではないかと思うのです。悪いことをしているからどうも相手は日本を攻撃するらしい、するのじゃあなかろうか、きつとするに違ひない、ところが今思ひ始めてゐる。ではどんな悪いことをしたかを考えてみても、また、北朝鮮に悪いことをした覚えがあるかという、むしろ反対に北朝鮮が日本に悪いことをしたというのはいろいろあるのです。拉致事件だとかいろいろありますが、日本が北朝鮮に悪いことをしたというのはあまり無いのではないかと思うのです。にもかかわらず北朝鮮は日本を攻撃したがっていると思つてゐる、何かそこに思ひ違ひがあるように思ふのです。もしありとすればこういうことなのです。戦争が終るまでは三六年間日本は朝鮮半島を植民地支配した。戦争が終つたときに、カイロ宣言とポツダム宣言によつて朝鮮の独立を承認しなければならぬ、というのが日本の義務だつたわけです。無条件降伏したのだから、だから朝鮮の独立を承認するという義務を、日本は南側について、大韓民国についてはこれを果たした。大韓民国を承認して国交を正常化した。ところが三八度線の北の北朝鮮についてはまだその義務を果してゐないのです。北朝鮮を承認してゐないのです。だから悪いことをしたとすればその点ではないかという感じがするのです。あと、これはアメリカにやられて悪いことをしているのは米軍基地を置いていることなのです。これは北朝鮮からすればアメリカの問題。そうすると北朝鮮が日本を攻撃するするといつて怖がつてゐるのは、もし

本当にそこだけ取り上げて北朝鮮の攻撃から逃れようと思うのなら、在日米軍基地を全部やめればいいのです。そうすれば北朝鮮は日本には用はない。アメリカと韓国を相手にやるわけです。ところが米軍基地がたまたまあるために、北朝鮮は日本というのは韓国の後ろ盾のアメリカの子分として米軍基地をおいてやっている、こういうことで日本を敵視するとすれば敵視することがあるのかもしれない。

だけど、ここでおもしろいのはこの間小渕総理が中国へ行つて朱鎔基が誰かに話したことのなかに、朝鮮半島の問題で中国に「北朝鮮が無茶なことをしないように言つてほしい」ということを頼んだという報道があるのです。これは昔からあるのです。私が在勤していた頃からそうなのです。日本から来る代議士が殆ど中国と話をすると、或はまた中国経由で平壤に行くような代議士は皆、中国は北朝鮮と仲がいいのだから、北朝鮮に無茶なことをしないように、もう少しお利口な国になるように言つてくれと頼むのです。これはものすごいお門違いだと私は思うのです。当時既にお門違いだというのは、中国は北朝鮮を信用していいのです、基本的に。もつとはつきり言うなら嫌いなのです。何故そうかという、朝鮮動乱のときに中国とソ連が北朝鮮を支援した、韓国の方は国連軍、米軍を主体とする国連軍がこれを支援して南北争ったわけですが、そのときにソ連は金と武器・弾薬しか北朝鮮に与えなかった、ところが中国は義勇軍を出したのです、義勇軍が出て一

緒に戦ったのです。よく言われる表現によれば、血を流したのは中国、金ですましたのはソ連ということなのです。だから北朝鮮にとってみれば、中国の方により感謝しなければいけないのに、金日成という主席は中国とソ連を天秤にかけて、うまいこと自分の国を泳がせようとしている、それは許せない。これは中ソ対立になってからはもっとそうなのですが、中国こそお前達のために血を流したのに、相手のソ連とのバランスを考えて対中外交を考えるとというのはふざけている、そうはつきり言わないのですけれども、これが中国首脳の北朝鮮観なのです。当時私は北京でそれを痛感したのです。そんな中国に北朝鮮に何とか言ってくれと頼んで言うことをきくはずがないのに、日本の政治家は誰一人としてそういうことが分らないのです。何で分らないのか、私なんかが説明したって、説明したときは聞いているのです。聞いているのだけれど分らないのです。だからよく言う「耳は持っているのですが聞く耳は持っていない」のです。聞えているのですけれども聞いていないのです。だから幾ら言っても駄目だと思うのですがまだ駄目です、今でも。そうすると中国としては、やっぱりメンツもあるし、中華思想の国ですから、「ああ分りましたよ、何とか言っておきましょう、けどあの国も主体思想、チュチュエというのがあって、なかなか言うことを必ずしもきかないのですけれども。」とこういう言い方をするのです。その最後のところが本当なのです。言うことをきかない、言ってもしょうがないから言わ

ない、言わないということを中国に言われているのに、政治家は何にも分らないで、日本へ帰って来て、わしは北京へ行つて中国に頼んで来たぞとそんなことを言っているのです。それは北朝鮮に対する中国の姿勢の問題として、ちよつとエピソードとして申上げたのですけれども、ですから北朝鮮というのは今世界の中で一番孤立している国の尻から二番目だと思ふのです。一番尻にいるのは台湾なのです。

あとで台湾の話になると思いますけれども。だつて北朝鮮は南と一緒に国連に入っています。だけど台湾は入っていないのです。よく日本は中国を孤立させてはならない、北朝鮮を孤立させてはならない、国際社会に引きずり出しましょうなんて、そんなことを言うけれども、ドンドンドン孤立させているのが北朝鮮と台湾なのです。北朝鮮はそういうふうに孤立させられて淋しくて不安で仕様がなない。そういう国が何をするかというと、やつぱり今やっているようなことをやるのでしょう。ミサイルを開発してちよつと実験してみたり、核兵器だつて事と次第によつてはやるぞというような姿勢を見せてみたり、いろいろやるわけです。ですが軍事的にみて、北朝鮮が米軍にとつてアメリカにとつて脅威であるというのは非常識です。もしそんなことをいうならば、アメリカのような世界一の軍事大国にとって、あのちっぽけな北朝鮮が脅威であるはずがない。だのにアメリカは、北朝鮮は北東アジアにおける不安定要因で、あれは安定を乱す恐れがあると、日本にとつ

ても脅威だと言わんばかりのことを言うのは、先程申し上げたように、そう言わないと日本は日米安保の必要性を分つてくれない、こういうことを言つたら日本人は引つかかるかなと思つて言つたら案の定引つかかつて、今アメリカや韓国が北朝鮮に太陽政策といつて多少融和穏健政策をとっているのに、小渕総理は何と言っているかという、中国へ行つても、金大中大統領と話をしても、「日本としてはあなた達の太陽政策を支持します。太陽政策が成功することはいいいことだと思います。」そういうことを言っているのです。アメリカも「あめ」と「むち」で太陽政策もやっているのです。北朝鮮に言わせれば、今一番北朝鮮を援助をしてくれない、冷たいのは日本だということです。ひとの太陽政策は支持するけれども、自分は北風政策ばかりをやっているのです。それを重ねると、やはり北朝鮮に嫌われているな、いざとなると北朝鮮は日本を攻撃するかもしれないというふうに、被害妄想になるのも無理もない面があります。ですから北朝鮮が脅威だということに関連して色々な妙な思惑があつて、こんなものを真に受けて、だからガイドラインでちゃんとやらなければ駄目だ、現にあの不審な船が入つて来たつてどうするつもりだなんて言うのです。あんなのはほつておけばいいではないですか、あんな船なんて僕は思うのです。それよりも大事なことは、そういう領海侵犯をしたときに、お前は国際法に反して領海侵犯してはならぬ、侵犯したときはこうなるのだ、ということをやちゃんと同じテーブルで話が

できるような関係を持てばいいのです。けれども、日本は北朝鮮とそういう関係にはないのです。先程言ったように自分で作らないのです。南は認めているけれども北は認めていないのです。だから同じテーブルにつけないのです。だから同じテーブルにつける中国に頼んだり、韓国に頼んだりしているのです。そんなに心配だったら、北朝鮮をちゃんと承認して、国際社会のそれこそ国と国の関係になって、国と国の関係としていろいろのトラブルを解決していく、こういうオーソドックスな手段でやればいいではないかというのが北朝鮮の問題なのです。

台湾海峡も不安定だと言いますが、これもアメリカの「ためにする議論」に日本は引つかかっていると思うのです。これも冷静に考えて、台湾がいま中国と事をかまえるというか、武力で対決するなどということを考えるはずがないという初步的なことが何故分らないのだろうかと私は思うのです。こういうふうには兵器も戦術も技術進歩のお蔭で高度に発達してしまったこの世の中では、そううかうかと武力戦争などというのはできない。それはコソボの空爆をみても、その前の湾岸戦争をみても分るわけです。ああいうことを見ている台湾が、いわんや李登輝總統が武力で中国と事をかまえるようなことをするはずがない。李登輝總統は私と京都大学同期ですが、彼は農学部で私は法学部ですから大学時代はちっとも知りませんでしたけれども、数年前に会ったときにその話をしたら、彼は私より

も二週間後に生まれているのです。私が一二月三〇日生れて彼が翌年の一月一五日生まれなのです。ということが分つて同じ頃だなという話をしたのですけれども、彼も学徒出陣で日本軍のなかで戦つた人です。彼の立場からみて、彼が中国の武力介入を誘うようなことをするはずがない。これには私は確信をもっているのですけれども、そうではない人もいるし、そうでない方がいいと思う人もいらっしゃるのです。中共みたいなけしからんやつはやつつければいい、台湾にはアメリカが付いているのだから、堂々と戦えばいい、そういうことすら考える人がいる位なのです。これも台湾海峡波高しといつて、いつだったか中国がミサイルの実験をやつたら、台湾の北の海の中に落ちたといつて恐れおののいた。独立国は自分で兵器を開発する権利もあるし、開発した兵器を実験する権利もあるわけですから、どこで何を開発し、何を実験しようとするものは誰からも文句を言われる筋合のものではない。自分の国を守る力というのは自分で決めればいい。

ところが世界に自分の国を守る力を自分で決められない国が一つだけあるのです。それが我が日本です。防衛費がその年のGNPの1%の枠を越えてはならんなんて、三木さんの頃に自分で勝手に作つて、それで防衛予算が出てくると、1%枠の中か外かなんて一生懸命計算して1%を越ええると厄介だと言う。それは何が厄介かというと、当時は野党がそういうことを言っていたのですけれども、野党はそれをよその国へ持つていくわけです。

中国とかに行つて、「申上げますが、我が与党は1%の枠を突破するような予算を今度は組んでいるのですよ、どう思いますか」と言うわけです。そう言われたら中国としてはそれは良くないねと言う、それを聴いて日本に帰つて来ると、中国は今度の予算は良くないと言つておつたと言ひふらして、それを政府攻撃の材料にするのです。こんな情けない国に誰がした、それは我々がしたのです、やっぱり。主権者はもつとしつかりしなければいかんと思うのです。それがまだまだ残つていて自分のことが自分で決められないのです、日本は。野党の顔色を見るのはまだしも、外国の顔色を見てでないと決められない。だからよその国もそうだと思つてゐるのです。

日本が駄目だと言つたらきつと北朝鮮は実験を思い止まるだろうなどと思つていたとするとそれはとんでもない話で、誰が何と言おうと主権国は自分の国を守るためにどんな兵器でも開発するし実験もする。だからそれはもう大前提なので、ただ実験が実弾の攻撃になるとこれは大変ですけれども、核実験の問題もありますが。そういうことで、台湾海峡でドンパチが始まるなどと言うのは、ガイドライン法案を通すためにそういうことを言つてゐるだけです。台湾海峡は怖い、だから我々はこういう法律が必要なのだ、もし台湾で独立運動があつてそれが武力闘争に発展すると、中国はこれに介入するだろう。そうするとアメリカは台湾関係法という国内法があつて、アメリカは台湾を守る義務を負つてゐる

わけです。だから米軍が出動する、そうすると台湾海峡を挟んで米軍と中国軍が戦争をする、さあ日本はどうするのだ、大変ではないか、その時には日本は日中共同声明があるから中国の方について、米軍には協力できませんなんてそういうことを言われたのではアメリカとしては困るから、その点はガイドラインのなかでしっかり決めておくのだと言って、今のガイドライン法は細かくいろいろなことを決めているのだと、こういう説明をするのです。そんな説明は全く無駄な意味のない説明だと私は思うのですけれども、それを真に受けている人がいるのです、やっぱり。防衛とかそういうことが好きな人は、議論はそっちの方が面白いのです。いざとなったら米軍の空中給油するにはどうしたらいいかとか、米軍の艦船が補給のために立ち寄って来たときにはどうすれば良いかとか、さらには難民が出て来てひたひたと日本海沿岸に上陸して来たらどうして防ぐのだとか、これは戦争ごっこです。

人間は動物ですから戦争ごっこは好きです。だから防衛制服の人達はやっぱりそういうことがないと商売が繁盛しないので、そういうことがあるといいなとは思わないまでも、あっても俺はやるのだということを図上作戦でいろいろやるのです。それで、台湾海峡の問題も、あたかも差迫った危険であるかのごとくに言って、だからこの法案を通すのだというふうに持って行っている。アメリカはどこまでそれを期待しているかというところ、

米軍も制服の人はお互いに戦争をしたい人達ですから、軍人同士はそういう話をするでしょう。しかしアメリカが本当に考えていることは、先程申上げたようにグローバルなアメリカの戦略に在日米軍基地が不可欠である。つまり太平洋を横断してインド洋から中東にまでずっと伸びて米軍が出ていくよりも、在日米軍基地を中継地にしたほうが、またそこに少なくとも一〇万の海兵隊がいたほうがいいというのは当り前のことなので、それを確保するために今のようなことをやっているというのが、真相だと思うのです。

ですからそれほど脅威でもない、不安定でもないのに、安保条約を「拡大する」と書いてある。この「拡大」というところがあんまり議論されていけないのですけれども、日米安保条約には「極東」と書いてあるのです。「極東」における平和と安全が脅かされたときに日米が協力していこうということは書いてある。この極東とはどこかというと、フーリーストというのは凡そ常識的にこのへんだろうというところがあって、フィリピン以北、台湾、朝鮮を含むとか何とかというふうに書いてありました。今まではそれでまあ統一見解とか言って済ましていた。今度は極東というのは無くなったのです、字は残っているのですけれども、ガイドラインの中身にはそう書いてないのです。日本の平和と安全に重大な影響をおよぼす「事態」、地域ではなくて事態です。そういう状況です。日本の平和と安全に重大な影響を及す事態といったら、いったい何処だという地域的な限定はありません。

ないので、今のように世の中が進歩すると。極端な話として太陽系が大きく変動して均衡が無くなるというようなことになる、これも日本の平和と安全に重大な影響を及ぼす事態です、一種の。それでは太陽系を守るために米軍が出動するということだって抽象的にはありうるのです。要するに台湾が入るかどうかというそんな話ではなくて、本当に日本の平和と安全が脅かされるのなら、その事態が南極で起きようと北極で起きようと赤道直下であろうと、何処で起きようと日本の平和と安全が脅かされるのなら、これに對して米軍が出て行く。これに日本が協力する。これは当り前のことではないですか、と僕は思うのです。

日米安保体制で日本を守るということに積極的か消極的かは別として異議を唱えないのであれば、それがフルに活動するためにそのガイドラインの地域というのはどこにでも及び得る、どんな事態にも備え得る、というふうにしておこうというのはむしろ日本がアメリカに要求しても良いくらいの話なのに、アメリカがなんか言う日本はいや憲法が御座います、何とかが御座いますと言つてびびっているのは、極めて首尾一貫していないと思うのです。そういうことで、今ガイドライン法で、日本がアメリカの上手に作り上げた虚構フィクションにすっかり乗っかっちゃって、北朝鮮がこわい、台湾海峡が不安定だ、だからガイドラインも或る程度認めよう、その時には船は何処まで行くとか、臨検搜索は

できるかできないかと言った、そういうことにどんどん憂き身をやつしているのは、アメリカからみると、腕を組んでにたにた笑ってフンフン日本はやっている、いいぞいいぞと思っているに違いないのです。これによって米軍は日本の基地を当分保持し続けることができる。

こういう日本になったについては、アメリカの日本占領政策の成功と私は言いたい。これは無条件降伏したときに、日本がアメリカの占領下に入ったわけですが、これは他の国の占領下に入るよりはずっと良かったと思うのです。アメリカの占領政策の初期の対日政策というのは当然ですけれども、日本を腰抜けにすることです。真珠湾の奇襲攻撃から始まってあんなめっちゃなことをやった日本に、再びそんなことをさせないように、腰抜けにする、日本を腰抜けにするためには再び戦争をしないと約束させなければいけない、これが憲法九条です。憲法九条というのは、アメリカが日本を腰抜けにするために日本に押しつけた条文であるといってもいいと私は思うのです。一般にはマッカーサーは幣原が言ったんだと方々で言って、多くの人もそう信じているようですが、私はたまひよんなことからニューヨークでマッカーサーと園田直、もう亡くなりました園田外務大臣、当時は特使だったのですが、ウォードルフ・アストリア・ホテルの三〇何階かで会談したのに立会って、私はどちらかというとフランス語だというのは、フランス語も英

語も同じだといって通訳をやらされて、マッカーサーと園田直の会談の通訳をした。そのときにいろいろの話が出たのですが、マッカーサーの方からしきりに憲法九条のことを言うのです。憲法九条は立派な条文だ、あれは本当にいい条文だ、あれは幣原が言出したのだ、幣原がそれを言っただけで自分は感激したのだ。だから自分はそれにOKしたのだ、あれは幣原が言ったのだ、幣原が言ったのだとくどくどい彼が言うのは、いわゆる「語るに落ちる」ということで、これはやっぱりアメリカが日本に押しつけたのだと私は思ったのです。こういうのを「聞く耳を持つている」ということだと思ふのです。本当に幣原が言っただけで日本が持出したポリシーであるならば、何もそんなにマッカーサーが言うはずはない、私はそういうふうに受止めている。ですから、今でもあれは幣原が言出したのだという形でアメリカが日本に押しつけた、日本を腰抜けにする一つの条文であつたと、私は思うのです。戦争をしないというばかりではなくて、戦力も持たない、つまり軍備もしない、日本は無条件降伏ですから、そのとおり受けたわけです。ところが、そのうちにそのまま弱い日本になつたのではアメリカとしては困る事態になつて来たのです。中ソ一枚岩で共産主義がアジアに南下してくる、中ソの共産主義の南下を防ぐ防波堤はやはり日本、韓国、台湾、フィリピン、南ベトナム、シンガポール、この線、この線が反共防波堤なのです。その防波堤の一番上のところに丁度弓なりになつて南下を防ぐ形にある日本という国を、

反共防波堤にしなければいかんということになり、弱腰だけでは困る、そうかといって軍事力を持たせるとこいつろくなことをしない、いたずらっこだから。だからこれは軍事力を持たせない程度の防波堤にするというので、日米安保体制というものを置いて、軍事的には米軍がみてやるからお前は余計なことをしなくても良い、安心して今度は経済力を身に着けろということになった。反共防波堤の一翼を担った日本は経済建設、つまり経済力を身につけるということに専念しろということで、御承知のような外資法を始めとして色々な法制も整備して、日本に金も技術も分け与えてやろう、だから日本は働け、お前は頭もいいし真面目なのだから働け、働けば必ず金は儲る、儲ったらそれで開発途上の国を助けてくれ、そうすればアメリカの負担も安く上がるのだと、そこまで言ったかどうか知りませんが、そういうことで日本の経済建設に非常に肩入れしてくれたわけです。日本人は我々みんなそうですがみんな真面目で人がいいのです。涙が出る位人がいいのです。一生懸命に働いて一生懸命に稼いで、経済大国になったとG7の金持グループのなかにはいつて、年に一回どっかで写真なんか撮って一人だけ寸法の足りないのが入っていても、それでも、G7へ行つて来たと行って、得意になっているでしょう。そういうことをして日本は大国の仲間に入つたつもりになったのです。これは大変な間違いをおかしていると僕は思うのですけれども、とにかくアメリカの思う壺なのです。今でもアメリカは日本に

力を持たせない、再軍備をしたり交戦権を認めてはいかん、これは腰抜けのままでいい、一生懸命働いて金を儲けたときはよかったけれど、この頃はバブルがはじけて力がない、それでも強くなり過ぎるよりはいい、日本は害を及ぼさないでそこにいればいい、おれはそこに軍事基地だけをもっておればいい、経済的には勿論、日米経済補完というかお互いに資本主義陣営として、特に技術交流、技術発展、技術進歩の面では関係が深いわけですが、基本的にはアメリカの日本を見る目は占領政策の時から変っていないと私は思うのです。それにまんまと乗ったために、日本はどうなったかということとことん骨抜きになつて、腰抜けになつて自分で自分の国を守るといふことは忘れてしまつてゐる。それを言出すと、憲法学者の土井たか子さんは、まるで自分が憲法を決めたような、作つたような顔をして、「憲法違反だ」「やるっきゃあない」と言うのですが、そうではないと僕は思うのです。人からもらった憲法でもいいところはいい、悪いところは悪いときちんきちんとやればいいのですけれども、とにかく憲法には指を触れてはいかんと言う。特に憲法九条は不磨の大典といわれた大日本帝国憲法的一条と三条のような、天皇は不可侵だとか、統帥権をもっているとか、ああいう触れてはならない条文のように、憲法九条を後生大事に日本人は守っています。これまた、アメリカとしてはうまくいったな、こんなにうまくいった占領政策はなかったと思つてゐるに違ひないと思うのです。こんな腰抜けの国にして

しまつて、それでいいところだけ自分が吸取る、そういうふうになっている日本なのに、日本はやはりアメリカと一緒にいるのが一番安全なのだと、テレビ評論家などが得意になつて言うわけでしょう。新聞も相当それに影響されていますが、アメリカの覇権主義というものがその根幹にあるわけで、冷戦時代はソ連共産圏に対抗するためのアメリカ陣営の覇権主義だったのですが、冷戦がなくなつた今は、よく言われる一国覇権主義です。そういうものがガイドラインの問題の本質であるということをおうとしたのが第一の点なのです。

## 日中関係

そこで話をがらりと変えて「日中関係」——「歴史認識」の裏に悪魔がいるという話をしないといけないのですが、歴史認識というのは何かというと、何と言ふことはない、戦争は悪かつた、あれは侵略の戦争であつた、だから責任を痛感しています、悪いことは二度と致しませんとそういうことをはつきり言えと言っているのに、日本は言ったのか言わないのかわからんことを言つて、煮え切らない、曖昧、なぜそうなんだということです。私はそこに大事なことが隠されているとかねがね思っているのですが、それは周恩来の深謀遠慮です。周恩来の深謀遠慮というのは、これは大変なことだと思ふのです。イギリスの

外交官か誰かが書いた本で、「立派な外交官というのは国益を守るために上手に嘘をつくことのできる正直な人」とこういう定義をしているらしい。僕自身も、そう言われてみれば国益を守るために上手に嘘をつくということはよくあります。正直な人というのが問題なのですが、周恩来という人はまさしくそういう人だったと思うのです。周恩来がこういう嘘を、どういう上手な嘘をついたかというところ、あの戦争は一握りの軍国主義者がやった戦争で、日本国民には罪が無いとこういう嘘をついたのです。つまり、あれはA級戦犯が悪いのだ、A級戦犯がそのかして善良なる日本人をみんな戦争に駆り立てて犠牲にした、その結果として日本は原爆を受けたりして大きな損害を受けた、日本人民は中国人民と同じように軍国主義者の犠牲者だ、悪いのは一握りのA級戦犯だとかいう嘘をついた、上手な嘘を。何故周恩来はそういう嘘をつかなければいかなかったか、そういう嘘をつかないと当時の四億か五億の中国人民は日本人を許さない、日本人を許すことができない、どんなことがあっても日本人に復讐する、そういう気持が強いのです。今でもそうなのですけれども、みな日本軍にやられて、一握りの軍国主義者だけではない、日本人は大嫌いだというのがいっぱいいるのです。そして、そういう思い出を持っている中国人達は、一体日中正常化で周恩来は日本から賠償も取らない、戦争賠償を放棄するといって賠償を取らない、そんなことを許すのかということ。人民からすれば、我々何億という中国人民が

生命財産にこれだけ損害を受けてひどい目にあったのに、周恩来さんあなたは日本から賠償を取らないなんてどうしてなんだ。日清戦争の後で日本は清国から大変な賠償を取ったではないか、台湾まで持っていったではないか。そういうことを思えば、当時の中共、毛沢東、周恩来は日本と国交を正常化するに当って、びた一文も賠償を請求しないということとを国民に納得させなければならぬ、ここで大変な苦労があったということです。そこで考え出した上手な嘘が、一握りのA級戦犯が悪いのだと言って、全ての悪をそこになすりつけてこれを葬って、あとの日本人はみんなその犠牲者で、我々と同じようにいい人達なのだということであつたのです。だから日本人と中国人は子々孫々友好協力関係を続けに行くのだ、だから日中友好、日中友好と言って叫んだその裏には、友好の相手である日本人民はいい人民だ、A級戦犯だけが悪いのだと、これで整理したのです。これを中国の津々浦々まで党の幹部が行って中国人を説得したのです。中国人も当時、今でもそうだけれども、党の中央のそういう説得には応じる以外には道がないので、よし、無理でもそう思おう。ですから今でも中国人は田舎の方に行っても、いやいやあなた達が悪いのではありません、悪いのはあのA級戦犯の一握りの軍国主義者ですと言う人が、まだ残っています。それは周恩来が国益を守るために上手な嘘について、そしてまとめた結果です。それが日中正常化だったと私は思うのです。何故そんなことまでして日中友好を彼が言わな

ければならなかったか、本当のねらいは日本の物と金と技術が欲しかったのです。物と金と技術を日本からもらって、安くもらって、そして中国という国を経済建設しよう、改革開放で中国を立派な国にするために、遠い欧米まで行かなくても手っ取り早く日本に、一生懸命に働いた果実があるではないか、あれを安く手に入れる、そのためには日中友好日中友好と言ったただけだいたいて安くいいものをもらって、植民地支配で遅れた中国を早く発展させよう、これが国益です。ですからそういう国益を守るために、上手な嘘をついた正直な人が周恩来であった、と私はそう思うのです。

この周恩来の深謀遠慮を、これは中国人を説得するための上手な嘘だったのですが、その嘘に今度は日本人がまんまと乗ったのです。日本の人は本当に善良だと思っただけです。そう、そう、日本から賠償なんか取るのはけしからん、賠償が無くてああ良かった。あんなところに賠償を払うことになったらとても日本は大変だ。悪い奴は一握りの戦犯だけで、我々日本人は悪くなかったのだ、我々は一生懸命天皇陛下万歳と言って戦場に死に行っただけ、あれはだまされたのだ、だました奴はA級戦犯で我々は善良なのだ、だから我々は中国にあやまる必要なんか無い、というふうにどんどん発展して、その拳句の果ては、そもそもあの戦争なんて大体侵略では無かったとそんなところまで行くのです。侵略じゃなかった、あれは正義の戦争だった、アジアの国を開放するための人民解放闘争だ

った、南京虐殺、あんなものは無かった、それは中国のでっちあげだ、というふうに日本人の方は、今度はどんどん自分で自分を美化して周恩来が作り上げた上手な嘘に乗って、自分は罪が無かったというふうに思い込み過ぎたために、戦争責任というものが、中国が期待しているような戦争責任感というようなものは、日本人にはもう無くなっている、というのが歴史認識の根幹にある問題だと私は思うのです。

それで、もし本当に一握りの戦犯が責任者で我々は悪くない、丁度ドイツがやったように、ナチスが悪いのでドイツ人は悪くないのだというようなフィクションを、そういうことを言うのであれば、日本人の手で戦犯を裁かなければいけない。あの戦犯というのは日本人が裁いたのではないのです。あれは連合国が勝手に裁いたのです。東京裁判は、勝った者が負けた者を裁いたので公正であるはずがないのです。だから本当にあの戦争の責任者は何処にいるのか、昭和天皇なのか、それとも陸軍なのか、海軍なのか、どこなんだ、あるいは右翼なのか、いろんな要素があったと思う。その何処があの戦争の責任を負うべきものかということ、われわれ日本人の手ではつきり裁けば、そうすればよその国からあの戦争の責任は何だと言われたときに、日本人が我々がちゃんと結論を出したように、これこれこういうことがあの戦争の責任の問題だ、それに対して日本人は、生残った我々はどういうふうに罪を追求し、責任を明らかにしてあるのだと、いうことができるのです。

けれども、日本はそれをやっていない、何にもやっていない。

いわんやA級戦犯なんて勝手に作った「平和に対する罪」とか、そんなものは戦争する時には無かった、一般の刑法でも、何か行為をしたときにそれが何も法律にふれてないものを、後から法律を作ってその行為を罰することはできない。

これは罪刑法定主義のABCです。あのときの戦争で「平和に対する罪」とか、「人道に対する罪」とかは無かったのです。後で勝手に作ったのです。もし、後で作ったものがあるのだと言うなら、原爆を落したのは「人道に対する罪」でないと云えるかというと言えないのです。あんなもの、戦争目的ではあるけれども、その結果として出てきた「人道に対する罪」については、これは当然原爆を落した国の責任としては追及されなければいけない、だけれどもそんなことはしていいのです。「人道に対する罪」なんて片手落ちなのです。「片手落ち」という語は差別用語だそうですね、片手落ちなのです。だからそういうふうにはいいかげんなままで来ているのが、歴史認識の底にあるのです。

ですから、中国が、江沢民が偉そうなことを言っただけに触りますが、癪に触ったけれど、何であんな偉そうなことを言うのかということを考えると、彼自身の個人的な体験もあるということとは事実ですけども、それからまた、彼独特の非常に浅薄な、器の小さい個人的なスタイルもありますけれども、しかし、根っこはそういう戦争の責任の問題について、

日本人はよく分っていないところにあるのではないか。何とかいう防衛長官が自衛のための戦争だったとか、侵略は無かったとか言う、そういう閣僚がでたり、政府与党の幹部がそういうことを言ったときに、総理が直ぐにその大臣をくびにしたかという、それは無いではないですか。その真意が伝わっていないとか、言葉が足りなかったとか、なんかぐじやぐじや言い、それに対して新聞やなんかがわーわー言います。すると、やっぱりまたなかなか、やっぱりこの辺で何とかしておかないといかんかなあと言って、二、三か月経って更迭したりしている。それで一件落着なんて思っているかもしれないけれども、それは国内で落着いたと勝手に思っているだけであって、中国の目から見れば、何たる生ぬるいことをやっているのだ、あれが侵略でなかったと言った奴は直ぐにその場でくびにする。そういうことのできない総理なんて信用できないということです。

中曽根総理が靖国神社に公式参拝したとき、我々が一番これが張本人だという人間が祀られている靖国神社に、総理大臣ともあろうものが公式に参拝して、名誉回復せんばかりのことをするのは許せない、と言って彼等は怒ったのです。そのとき私は大使をしていたので、その時は胡耀邦が総書記だったのですが、違うのだ、中曽根さんがやっているのは違うのだ、一つはあの人の兄弟で祀られている人がいるので、その霊を弔うということもあるが、それはまあプライベートのことだ。けれども、かりそめにも日本という国を守る

ために、命を捨て血を流した英霊が祀られている靖国神社に、のうのうと生延びてしかも繁栄をきわめてきた立派な国を作り直した我々日本の新しい日本の世代が、どうも皆さんご苦労をかけました、安らかにお眠りだろうと思うけれども、安心してください、日本はこういう風に立派になりましたということを報告することは当然の義務だ。そのことを中国がごちやごちや文句を言うことは、それは世間の常識に反するではないか、ということをお大分やったのです。そして段々議論したら、つきつめていくと何のことはない「あなた、東條さんは国のために血を流したのですか」とこういうことです。ひとことで言えば、つまりA級戦犯というのは血を流したのではなくて絞首刑なのです。これは英霊と違う、この一握りの軍国主義者こそが戦争の責任を負うべきだと、中国は折角上手に嘘をついて日本人達には罪はないというフィクションのもとに、国交正常化したのだから、せめてこの罪を集約したA級戦犯位はきちんとけじめをつけてもらわなければ困るというのが、中国の言分なのです。

そこで中曽根さんはなるほどそれは分った、それならやつぱりこれは分ければいい、こちらはA級戦犯の祠、こちらは一般の英霊のための靖国神社、というように靖国神社のなかにA級戦犯の遺族の方達のために、別の神社とかそういう場所を作ろうとしたのです。ところが、靖国神社の宮司はそういうものは絶対認められない、というのは神社法か

何かで、総理大臣といえども宮司に指令することはできないのです。東條さんも一般の兵士も死んだらみんな神様、仏様です。遺族がお参りするのに差別があつてはなりません、と言って分けることに反対するのです。反対ができないのならこれはやっぱり中国のそういう気持は分らんではないからというので、中曽根総理はそれ以来ずっと靖国公式参拝はしなかった。中国もなるほど日本も一応分つてくれたなと思つていたら、一一年経つたら今度は橋本龍太郎という総理が、また公式参拝した。そこで中国としては、ああ、とため息をついたわけです。本当に日本は何て信用ならん国だと、一〇年経つたらもう忘れてゐるのだ、こういうことです。靖国批判と政治音痴ということです。

そういうことはあつたにしろ、この歴史認識で今ごたごたごたして、日本と中国の間というのは冷え込んで来て、特に江沢民の訪日は中国のなかでも評判が悪くて、深く反省するところがあつたようで、今度小渕総理が行つたときは、そのことはあまり追求しないで、おこう、事前にちゃんとそうすることになった。そういうときに彼等はどういう言い方をするかというと、中国は伝統的に外からお出でになつたお客様に恥をかかせたり、苦しい立場に追込めたりするようなことは御座いませぬ、とこういう言い方をするのです。さすが、大人の国だと思ふのですがそんなことは嘘です。国交正常化のときだって、田中角栄のときだって、あるいは条約締結のときだって、よそから来たお客様に恥をかかせる

ようなことはいたしませんなんて、とんでもない、恥をかかせるようなことを平気で言います。それはものすごいのです。そういうときの中国の「ああ言うところ言う」というのは。それはまあ当然といえば当然なのです。国を守るために皆一生懸命にやるのです。今度も恥をかかせませんということによって、彼等は国を守っているのです。何を守っているかという、やっぱりでここで日本人が離れていつては困る。日本人を引留めなければいけない。今経済的にも困っているし、二一世紀の中国を立派にするためには、ここで恥をかかせま助というのは不可欠なのです。だからそれをつなぎ止めるためには、ここで恥をかかせませんと言っている気持にして帰さないといけないのです。で、一生懸命やるわけです。そうすると小渕さんは行っている気持になって帰って来るわけです。そういうところは何故そうなのかということを知った上でいい気持になってくれればいいのですけれども、本当にいい気持になっていると大変なことなのです。

そこで、日中関係全般についてですが、それは「日中不再戦か日中決戦」という問題に集約されると思います。つまり日本人は今二一世紀を前にして、中国とこれからどうするつもりなのか、絶対中国とは干戈を交えない、どんなことがあっても中国とは戦をするようなおろかなことはしないという決意があるのか、いやいや事と次第によってはあんなものやっつけるのだ、もし台湾に手を出してみろ、アメリカといっしょになって中国をや

つつけるのだ、それでも言うことをきかなければ、日本は自分で核開発をやってもいいくらいに、日本が軍事的に強くなければ言いたいことも言えないではないかと、そういう考え方と一体どちらを日本は選ぶのか、ということは今迫られているという危機感を、僕は個人的に持っているのです。それが丁度僕らの世代は皆さんそうだと思うのですけれども、気が付いたら我々は戦争に卷込まれていた、どういうふうにしてずるずるずるずると戦争に駆り出されていったかということを反省すると、そういう大きな流れの兆しというか、その萌芽は相当早いときに出ていたのではないかと思うのです。それを心ある人が押えてくれれば良かったのだけれど、押えようとする人などを、今度は特高などが出てきて弾圧したわけです。だからその正論を弾圧するような組織がいつ頃からできたのだろうか、それをそうだと行って、それをそそのかしてそれを奨励した分子というのが、日本の社会の何処から出てきたのだろうかということを、本当は私はもっと知りたいのです。私自身は幼稚で発育が遅れていたから、気が付いた時にはやむを得ず戦争に行つて、幸か不幸か帰つて来ましたけれども、しかし本当に気が付いていれば、あの時の共産党の人達や一部の基督教の人達のように、監獄に入つてでも戦争に抵抗するという道を選ぶべきであつたのかも知れないという氣もするのですが、そんな勇氣も知恵も無かつたのです。そうすると、そういうそれこそ善良なる、一億二千万人という日本の人達は、今もし危険な萌

芽があるならそれをつみ取らなければ、後五年か十年か、二十年したときに、丁度我々が巻込まれて行ったように、新しい日中不再戦ではなくて日中決戦の方に、中国に限りませんけれども、そういう方に引きずられて行くかも知れない。それでもいいのならそれも選択でしょう、しかしそんな不幸な世代を作らないようにするためにどうすればいいかというのは、今考えなければいけないと思うのです。

そこで台湾の問題がちょっと出ましたけれども、先程周恩来は上手な嘘をつきました。

国交正常化のときに私は椎名悦三郎特使と一緒に台湾に行きまして、蔣介石は病院に入院してしまして、その息子の蔣経国が当時行政院長（首相）だったのですが、蔣経国との会談をずっと一緒にやったのですけれども、その時に蔣経国が、これはさっき言った絶版になっている「らしくない大使のお話」にちゃんと書いてあるのですが、蔣経国はこういうのです。「椎名さんご安心なさい。共産主義というのは中国では絶対根付きません。共産主義というのは中国には根付かない、必ず失敗します。失敗したら我々中華民国、国民政府はもう一度中国大陸を取戻すのです。」こう言うのです。必ず失敗します。それには或る程度の説得力があるのです。そうかもしれないな、「じゃ一体いつ頃失敗するのですか、」と聞いたのです。蔣経国は「いやいや必ず失敗するのですから失敗するまで待てばいいのです。」「じゃ何時まで待つのですか」、「いや百年でも、二百年でも待ちます。」これが蔣

経国の言葉です。すごい面白い言葉だと僕は思ったのです。なるほど、その頃日本から北京に行った日本の要人が周恩来に同じようなことを迫った場面があったのです。周恩来は「台湾は中華人民共和国の不可分の領土の一部であります。日本はそれを認めなさい」というふうにやるわけです。そんなことを言うけれど、「あなたは台湾を統治したこともないし、解放してはいないではないか」と言うと、「いや中国は必ず台湾を解放します。」「何時解放する。」「いや必ず解放するのだけれど、二〇世紀中に解放しようなんてそんなことは思っていないません。」何のことはない当時一九七二年ですから、三〇年位は解放することはないということです。中国大陆は三〇年以内に解放しようとは思っていないというし、台湾の方は百年でも二百年でも待つと言っているでしょう。両方ともそんなにのんきなのに、ひとり永田町だけで、田中・大平どうする、台湾どうするのだ、ということばかり言っている。ここで大変な争いをしているのです、この日本の政治家の争いの、そのおかしさというのを私は痛感したのです。

何を考えているのだろう、相手をよく見てそれで論争するならともかく、相手は両方とも悠々としているのに、日本のなかで台湾派と反台湾派がきやあきやあ言って、つかみ合いの喧嘩をしたのです。おろかなことですけれどもそれがまだ続いているのです。それが中国人のものの考え方の一つの象徴的な場面だと思うのですが、もう一つ台湾について、

李登輝が最近「台湾の主張」という本を書きました。あれは面白い本です、お読みになると分るのですけれども。あれはどういうことを言っているかと言うと、要するに皆さん台湾を忘れないで下さいということなのです。さっき言いましたように、いま国際社会で一番忘れられているのは台湾なのです。その次は北朝鮮です。台湾はほっておけばどんどんどんどん忘れられて行くのです。自分自身は民主化されて立派に経済建設をやっている国になったと思っているし、それは客観的事実として嘘ではないのです。しかし国際社会では台湾というのは、スポーツ一つ参加するのでも、国の名称を台湾（中国）、チャイナ台湾とやるのか、ただ中国タイペイとやるのかとか、いろいろなことで一々いじめられながら、正当な椅子というものが何処にも用意されていない、可哀想な立場にあるわけです。それを率いている李登輝としては、台湾は忘れてはいかん、台湾は大事なのだということを言うために、「台湾の主張」という本は実によく書けている。それを讀むと、なるほど、なるほどそうだなと思うのです。それをそのまま信ずるかどうかが問題なところで、何故彼はそんなことを言うのか、そんなことを言うなら自分でやればいいではないかと思っていだら、最近李登輝は中国と台湾の關係は「国と国との關係」であると言い出したでしょう。これはまた物議をかもしているようなのです。これも李登輝になってみれば、何か言ってみんなの注目を浴びて、そして台湾を忘れないようにしておかないと困るので、一国

二制でいいですよなんて言ったら、香港やマカオと同じように、じゃあ台湾はいつか中国の中に一国二制で入るのだな、それで台湾はおしまい、こうなつては淋しいのです。だから、立派な国としてやっているつもりなのだから、とうとう国と国の関係と言った。そうしたら中国は何だお前、おれの領域の小さな部分にちよろつといるだけで国だなんて、そんなことはと言って怒るわけです。アメリカも中国が怒ると困るから、まあまあいい加減にしたまえと言って、今ちよつとなだめすかしている。李登輝もいや、別にそんな気はないけどただ言っただけだよということなのです。結局、つまり、台湾がいろいろああいふふうに主張するのは、百年二百年待っている間、みんなに忘れられては困るので、まあまあときどき色々のことを言ってみるという程度のことでもいいはずなのに、またこれを真に受ける人が世の中にいるのです。

そうだそうだ、台湾は国じゃあないかあれば、政府は何をしているのだ、中国中国というけれども、台湾は国だ、李登輝總統を日本に招待してもいいではないか。京都大学の同窓会に来るといふようなことでなくても、堂々と呼べばいいではないか、どんな国際会議でも台湾を入れてやればいいではないか、場合によっては国連にも入れてやればいいではないか、そういうことをまた言い出すのです。そういうことは腹の中でいくらそう思っている、そんなことはできない、当面はできないときに余計なことを言う必要はないので

す。一番余計なことを言ったのは石原慎太郎のおれは「支那」と呼ぶ、そう言うとおこるけれど自分は「支那」と呼ぶ。それは自分で勝手に「支那」と言ってもいいけれども、なんで都知事になったらとたんに、俺は中国は「支那」としか呼ばないなんて、そういう余計なことを言って何の足しになるかと、何の足しにもならない、そんなことを言ったって、というようなことで、昔戦時中に「ちょっと待て、言っていること悪いこと」という標語がありました。あれを今の政治家はもうちょっとよく考えて貰えばいいではないかと思うのです。言いたくても言っていないことと悪いことがある、そういうことのけじめのつかない人は、人の言ったことを真に受けて、台湾は偉くなってきた、台湾は、とこういうのですけれども、台湾がもし中・台は国と国の関係だというのなら、台湾は国だということを宣言しなければ駄目です。だってその生立ちをみると、あれは中国だったでしょう、中華民國だった、そこで革命が起きた、革命政府が中華人民共和国というのを作って、そして国民政府を追っ払ったのです。追出されて幸い台湾という島があったから良かったのです。あれがなけりゃあ何処へ行ったかもしれないけれども、追出されて台湾という島があったから、そこにたどり着いた。そこで「中華民國ここにあり」と、言ったわけです。大陸からは亡命政府がそんなところに逃げてやっても駄目だよと言ってほったらかしておいたところ、たどりついた島で、アメリカが一生懸命反共の基地として援助するものだから、だ

からその島でいい気持になって、段々段々やっているうちに日本とも関係が続いて、日本と台湾の関係というのは非常に発展しました。悪い記憶は無いのです。

私が椎名さんと台湾に行ったときも、当時の何応欽とか、蔣経国もそうですけれども、みな言うのです。我々は日本に対して何も悪いことした覚えは無い。日本とはいかにも仲良くしてきた、だのに日本は、田中角栄は我々を追出して、中国を選ぶのかということを増え、この次、決議案が出れば絶対負けるというところまで来ていた。そのとき日本は中国を選ぶわけです。そのときに日中国交正常化をしたら台湾はどう出るだろうか、これはきつと報復して台湾にいる日本人を全部収容する、あるいは追放する、台湾海峡を通過する日本のタンカーを撃沈する、色々なことがあり得る、そういう台湾の報復に対してどうするのだという声が出たのです。石原慎太郎が知恵袋になった例の「青嵐会」というのがあります。中川一郎とか、渡辺美智雄とか勇ましいのが沢山いました。玉置和郎とか、ああいう人達に当時私は現役で、国会に行くところと言われるわけです。先程ちよつと話があった、正常化の時の国会審議で委員会室に私が入って行くと、大臣の田中角栄とか大平正芳がいるのに、そういうのはいじめないで官僚いじめをやるのです。アジア局長が入ってきた、外務省はどうするつもりなのだ、タンカーが撃沈されたら責任をとるのか、

そんなこと僕に言われたって思うのだけれど、そういうことを言うわけです。つまり欲求不満で、言いたいことを言う相手がいらないものだから、僕のようなのを捕まえて言うわけです。先ず第一に飛行機が飛ばなくなる、日航をどうするのだ、というようなことだとか、もう激しかった。今から思えば面白い思い出ですけども、亡くなりました渡辺美智雄も生きてるとき私をつかまえると、中江君あのとときは本当に面白かったね、彼もやつぱり面白かったです。それが真意なのです。

あの時、日本が中国と国交正常化して台湾と国交断絶となったときには、台湾政府は声明を出すだろう、日本はけしからん、日本に対してはこういう報復手段をとるだろうというような強硬な声明が出るかもしれない。それをできるだけ強硬でないようにしようというのが、椎名ミツシヨンの務めだった。私は椎名ミツシヨンの随行で台湾工作をやりました。一番最後にいよいよ九月二九日に国交正常化されるという、その二八日の夜、夜中の午前二時頃、台湾の当時まだ大使館があつてその大使館から電話がかかって、私の自宅にもう亡くなった先輩ですけれども「おい中江君、声明文が出たよ、一番最後に「あれ」が入ったよ」とこう言ったのです。「あれが入った」それで私は分った、ああ良かったと思つたのです。「あれ」が入った、その「あれ」というのは何か、というと、これは周恩来の考え出した上手な嘘と同じ嘘があるのです。中華民国政府としては、今回の日本政府の

とった措置は田中・大平一派が間違つてとったもので、悪いのは田中・大平政権であつて、多くの日本人は引続き我々の友人であります。こういうのが入った。これが「あれ」なのです。それが入ることによつて日本の船を撃沈したり、日本人の財産を収用したり、追つ払つたりそういうことはもう無いのです。悪いのは田中、大平なのです。悪いのはA級戦犯というのと似ているのです。悪いのは田中・大平だ、だからあとはいいい、だから日本人仲良くしましょうねとこういふわけです。

ここに台湾であれ、中国であれ中国人達の日本に対する期待とそれをどういふふうに切抜けていくかという、ひとつの知恵があつて、そこに共通したものがある。つまり、中国の人というのは大変うそを付くのが上手だということなのです。こつちが腹を立てるような嘘ではないのです。こつちが何となく気持よくなるような嘘をつくのです。日本の人はそれにいい気持になるのです。これがまた何ともいえないところで、こういうことが続いていつていいのかどうか。これから中国とどうつきあうか。

北京で上演した私の書いたバレエのなかで中国がけちをつけたのは、「朝日」なのです。朝日が昇るの朝日です。何故朝日が困るかというと、あれは軍艦旗を連想するというのです。日の丸ではない軍艦旗、やっぱり中国大陸は陸戦隊、あの海軍の軍艦旗、あれがよほど強烈だったらしいのです。あれを連想するから朝日をやめてくれと、こういう話だった

のです。

そういうこともあって、今日の丸、君が代の問題だとか、それから有事立法です。さっき言ったようにアメリカが方便として考え出した脅威とか不安というものを真に受けて、それがいいよ差迫っているような気持ちに自分で自分を置いて、興奮して有事立法をやつて有事になったら、どうするか、難民がわんわん押寄せて来たらどうするか、一生懸命そんなことをやっている。こういうのは実は私がちょっとさっき申上げた早くつまなきやならない芽ではないかと思うのです。つまり多くの人が思い違いをしている、新聞も思い違いをしている、政府も思い違いをしている、政治家も思い違いをしている、みんなが思い違いをすると、それが当り前に見える、これをマインドコントロールというのだと思うのです。だから日本全体がマインドコントロールされていく萌芽がここにあるのだとすると、やっぱりこれは今つぶさなければならんだろうということを感じております。このへんで失礼します。どうも有難う御座いました。

（日本日中関係学会会長  
元・駐中国日本大使）